
古代アメリカ学会会報

第31号



トゥルム遺跡とカリブ海 ©多々良 穰

目次

- ◆会員からの寄稿・・・・・・・・・・・・・1
- ◆事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・17
- ◆第16回研究大会報告・・・・・・・・・・・・・8
- ◆編集後記・・・・・・・・・・・・・19

2012年1月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

●アマゾン民族資料を教え！

吉田栄人（東北大学大学院国際文化研究科准教授）

山形県鶴岡市にアマゾン民族館なるものがあることをご存知だろうか。山口吉彦氏（1942年、同市生まれ。1965年、東京農業大学農業拓殖科卒業）が私財を投げ打って収集してきた南米アマゾンを中心とする先住民文化に関するコレクションを、アマゾン資料館として自宅に公開したのが1982年。1991年には、山形県東田川郡朝日村（現鶴岡市）によって、同氏が所有する生物資料を中心としたアマゾン自然館が月山あさひ博物村内に開設される。そして、1994年、旧鶴岡市の支援を受けて出羽庄内国際村にアマゾン民族館が設置されたのである。同時に山口氏は同館長（現職）に就任する（ウィキペディア「山口吉彦」より）。ところが、2009年、鶴岡ルネサンス宣言の下、鶴岡市長に就任した榎本政規氏が進める行財政改革によって、このアマゾン民族館がアマゾン自然館とともに、2014年度に廃館になろうとしている。

理由は簡単だ。鶴岡市の財政健全化を図る上で、支出するばかりで入館料による収入が極僅かではない両館は、てっとり早く成果を上げることのできる対象に見えるのだ。両館への運営費および補助金は合わせて1億円以上（平成21年度）。それに対して両館の収入は約780万円（同年度）でしかない。歳出に対する歳入の割合だけを見れば、その非効率性は誰の目にも明らかだ。しかも、両館を廃止するだけで約1億円もの資金が浮くのである。公的施設、ましてや文化施設が金銭上の収益だけを目的としたものではないことは自明のはずだが、行財政改革の検討を委嘱された行財政改革推進委員会のメンバーたちはこのことをすっかり忘れていたかのようだ。

アマゾン民族館とアマゾン自然館の廃館を企図する鶴岡市のこの行財政改革は、ラテンアメリカをフィールドとする我々研究者、とりわけ先住民文化に関する研究を行う者にとって、対岸で起こった火事などではないし、また傍観していれば済むようなものでは決してない。この改革は我々にいくつもの大きな課題を突きつけている。今まさに、ラテンアメリカをフィールドとする先住民文化研究者（その多くは古代アメリカ文化研究者で

ある）の存在が問われているのだとも言えよう。

我々に突きつけられた課題とは、アマゾンという異文化が日本社会、とりわけ個々の地域社会に果たす社会的文化的な役割（教育的な側面が強いだろう）をそこに暮らす人々にいかに認知してもらうかという研究者の社会的責任に関わるものだけでなく、廃館によって行き場を失うことになる膨大な数（1万点以上）の民族資料をいかに廃棄の危機から救うか、そしてそれを公共財としてどのように活用していくかである。



アマゾン民族館の全景 ©多々良 穰

アマゾン民族館は鶴岡市の国際交流センターとの併設であることから、館長の山口氏は国際交流の推進と国際理解のための様々な活動を自ら行なってきた。アマゾンはそうした国際交流および国際理解のための教育事業においてはシンボリックなものだったのかもしれない。有り体に言えば、鶴岡市にとって異文化がアマゾンであることはさして重要ではなかった。異文化を語るための道具立ておよび語り部が求められたのだ。開館当初は物珍しさも手伝って、それがアマゾンであることは問題とはならなかった。だが、アマゾンという異文化が一筋の輝きを失った時、人々は山口氏所有の民族資料が持つ本来の価値を知る術をも同時に見失ったかのようだ。鶴岡市とアマゾンという組み合わせには違和感を覚えるという意見さえ行財政改革推進委員会のメンバーから出ている。山口氏の民族資料が持つ文化的価値を認めるにしても、その維持管理を鶴岡市という一地方都市が担うのは重すぎるというのが鶴岡市の現在のスタンスのようだ。鶴岡市の名誉のために記しておこう。

鶴岡市は実は両館を廃止することを最初から計画していたわけではない。行財政改革の検討が開始された段階では両館を一つに統合し、経費を削減するだけで済ます予定だった。ところが、推進委員会のある委員の「違和感」発言を境にして、流れは一気に廃館へと傾いた（詳細は行財政改革推進委員会の議事録を参照されたい。<http://www.city.tsuruoka.lg.jp/gyokaku/index.html>）。その違和感を解きほぐせなかったこと、またその機会を手にすることができなかったことが一人のラテンアメリカ研究者として残念だし、また恥ずかしくも思う。今となっては、研究者として、鶴岡市あるいは現在の市長を直接説得してアマゾン民族館およびアマゾン自然館の廃館を翻意させる手段はもはや存在しないのかもしれない。後は政治的な手段に頼るしかない。だが、私にはその力がないこともまたもう一つの苦悩だ。

ただ、鶴岡市に対して一つだけ言わせて頂こう。山口氏の民族資料は日本が国家レベルで管理すべき文化財である以前に、山口吉彦という一鶴岡市民を通じて鶴岡市が手に入れた宝なのだ。鶴岡市はなぜそれをみすみす手放そうとするのか。委員の中には実はこう言っている人もいた。「そこで働く人たちや知識の豊富な人たちが知恵を出し合って、お金を生む方向で、施設の再利用をもう少し真剣に考えたらどうかと思います」。宝はすぐに金を生むものではない。周りの人たちが羨むからこそ宝なのだ。鶴岡市とすれば、その宝が市外に流出するのはいかにももったいないではないか。流出した後で気がついて後祭りだ。もう少し知恵を絞ってみても損はしないと思うのだが。

アマゾン民族館とアマゾン自然館が廃館になるにせよ、ならないにせよ、ラテンアメリカ研究者は日本が手に入れたこの貴重な民族資料をどのように利用すればよいのか、今から真剣に考えておくべきだ。ちなみに、体育館ほどの大きさがあるアマゾン民族館の収蔵庫には膨大な数の民族資料が未だ十分な分類も行われずに手付かずのまま眠っている。それはおそらく国立民族学博物館のアマゾン関連資料をもはるかに凌ぐ。そんなものが山形県鶴岡市にあるのだ。なぜ鶴岡に、なのではない。それは鶴岡だから、だったのだ。日本最大規模のアマゾン民族資料をたった一人の手で収集し、鶴岡市に持ち帰られた山口吉彦氏に最大の賛

辞を送ろうではないか。山口吉彦さん、ありがとう。そして、一時期ではあってもそうした文化財を大切に守り、未来の世代に送り届けようとしてくれた鶴岡市にも。鶴岡、ありがとう。

●ティカル計画

中村 誠一（サイバー大学教授）

グアテマラの北部ペテン県の（重）熱帯ジャングル地帯に位置するティカル（世界複合遺産）は、最盛期のマヤ文明（古典期マヤ文明）の中心都市の一つであり、往時は100～120平方キロの政治的領域を有し、6万とも10万とも言われる人々が居住していた古代都市遺跡である。碑文記録の上では、紀元1世紀頃から10世紀頃まで少なくとも33人の支配者の存在が確認されている。測量地図の作られた16平方キロの範囲だけで3000を超える建造物址が記録されているが、ジャングルの中の建造物址の確認は極めて困難なことから、環濠と土塁によって囲まれていたと思われる100～120平方キロの範囲に、一体いくつの建造物が存在したのかは推測する以外にない。

ティカルは、道路がなければ到達するのに困難で過酷な立地条件にあるため、正式な発見が1848年と他の著名なマヤ遺跡に比べて遅いのも特徴の一つである。1848年といえば、すでにコパン、キリグア、パレンケ、ウシュマル、チチェン・イツァといった著名なマヤ文明の世界遺産が、スティーブンスとキャザウッドのコンビによって欧米世界に報告されており、彼らの『中米・チアパス・ユカタンにおける旅の出来事』が識者に広く読まれ、ベストセラーとなっていた頃である。近年、この本はグアテマラ在住の児嶋桂子さんのすばらしい邦訳と共に上下2巻本として出版されたので、是非、読んでみたい。

発見当初から、ティカルの摩天楼のような巨大な神殿ピラミッドは人々の目を引き付けていたが、1956年から69年にかけてペンシルバニア大学博物館によって空前絶後の一大プロジェクト（ティカルプロジェクト）が実施され、現在ではその成果によって、広くその遺跡規模や重要性が専門家だけではなく、一般の人々の間にまで広められている。地域全域が決して統一されず、各地に王家のネットワークで結ばれた数多くの古代都市が盛衰したのがマヤ

文明の大きな特徴の一つだが、それでもマヤ文明史にティカルなしの記述など考えられない。

ティカルという遺跡の名前は、マヤ文明の研究を志している人間にとっては特別な響きを持っている。ティカルは、必ず一度は現地に立って、高い神殿ピラミッドを仰ぎ見なければならない聖なる巡礼地のような存在でもある。また、私のような世代の研究者が学生の頃には、マヤ遺跡地図作製法、マヤ遺跡の発掘法、遺物分析法、建造物修復法など、マヤ考古学の様々な標準を確立した遺跡として、ティカルプロジェクトの調査研究成果が、いろいろなマヤ関係の論文や文献の中心を占めていたと記憶している。

ティカルの魅力の一端は、何といても生物多様性を保持した雄大なジャングルと、そこに廃墟としてたたずむ神殿ピラミッドのような古代建造物群のコントラストだろう。「失われた文明」という言葉を髣髴とさせるこの神秘的なイメージは、現在に至るまで一般の人たちのマヤ文明に対するイメージに根強く反映されている。ティカルは、長年親しんで来たコパンとは対照的な遺跡である。「ティカルをニューヨークとすれば、コパンはパリである」といった人もいたが、確かにティカルはコパンに比べて威圧的である。このティカルに関して、二つのトピックスを紹介したい。一つは、日本資金によるティカル保存・調査研究センター（Centro de Conservación e Investigación en Tikal）の建設に関してであり、二つ目は、私の母校でもある金沢大学が行おうとしているティカル調査に関してである。



ティカル「1号神殿ピラミッド」 ©中村 誠一

ティカル保存・調査研究センターの事業に関しては、雑誌『チャスキ』にも取り上げられている（桜

井敏浩「グアテマラティカル遺跡訪問—遺跡保存のための日本の協力」『チャスキ』 No.44、2011）。外務省や JICA が管轄する開発途上国への政府開発援助（ODA）の中核事業の一つが、無償資金協力であることはよく知られているが、かつては研究センター、博物館といった大きな建物を現地に建設しようとする文化的事業は、文化無償資金協力ではとうてい不可能で、通常は、各国とも上限 5,000 万円程度の機材供与案件が定番であった。20 年以上たつて、文化無償資金協力でも、やっと正論が理解されれば大きな案件もできるようになったのは好ましいことだが、ティカルのセンター案件に 7 年もかかってしまった。センターは 2012 年 7 月頃には完成する予定だが、重要なのはこれからである。

強固な労働組合によって、中間管理職までその雇用を守られているホンジュラスと違い、グアテマラでは 4 年で政権交代が行われると、ほとんどの職員・研究員が交代するのが常である。先日 2012 年 1 月 14 日に行われた新政権の誕生から、すでに人員交代が激しく行われている。1992 年からティカルを中心に活動を展開してきた旧宗主国であるスペインの開発庁プロジェクトも、虎視眈々とこのセンターの利用を見込んでいるに違いない。このセンターはティカルに建設しているが、中心からマヤ地域全域を見据えた広域センターでもある。そのため、今後、マヤ遺跡を有する隣国との連携や広域案件の形成が重要となってくるであろう。センターの主要目的は、日本とグアテマラを初めとするマヤ地域各国の文化遺産を巡る共同研究と人的・学術的交流、それを通じたグアテマラを初めとするマヤ地域各国と我が国自身の人材育成であるから、少なくともそのセンターの維持管理を担当するグアテマラ側人員には職務上の継続性が求められるのである。

その意味で、今後のセンター事業展開の一助となりそうなのが、ティカル調査に関心を示してくれた金沢大学である。金沢大学は、2010 年 10 月にグアテマラ文化スポーツ省と交流意向書（Carta de Intenciones）を締結しマヤ地域への進出を模索しはじめたが、2011 年 6 月に大学の公式訪問団がグアテマラを訪問、交流協定書やティカルにおけるプロジェクト実施のための覚書を締結した。そして、グアテマラ文化スポーツ大臣の金沢大学訪問等を経て、このたびティカルにおける考古学プロジェクト実施の正式許可をグアテマラ政府より取得した。プロジェ

クトには、上記センターの一部やティカル国立公園内のその他の施設三つも貸与される。大学側の実施主体は、2011年2月に人間社会研究域内に設置された国際文化資源学研究センターの形態文化資源部門である。大学生、大学院生のティカルでのフィールド実習や長期派遣も視野に入れる。他大学の院生でも受け入れを計画している。隣国ホンジュラスのコパン考古学プロジェクト（PROARCO）時代から調査に参加している本学会員の今泉和也（北海道大学博士課程）も、すでにJICA派遣の協力隊員（考古学）として2011年7月よりティカル入りしており、プロジェクトに主要調査員として参加する。

ティカルでは、2012年4月から「北のアクロポリス」とよばれる都市ティカルの中核地帯で活動を開始する。当然「保存」がメインテーマになる。マヤ考古学では、19世紀は探検の時代、20世紀は発掘の時代、そして21世紀は保存の時代だからである。しかし、もちろん北のアクロポリスおよびその周辺部の発掘調査も企画しており、グアテマラ政府から認可を受けている。学術的に、テオティワカンと古典期前期ティカル王朝の関係は、個人的に特に興味のあるテーマの一つである。マヤ研究ではしばしばそうなのだが、従来、この問題はマヤ碑文の解読結果という側面からのみ推測されている面が多いと感じている。著名な碑文解読家が我々の前に描いてみせるシナリオは、圧倒的な迫力を持っている。しかし、それらの復元も考古学的な裏づけを得なければ、具体的な歴史にはならない。エル・ミラドール全盛期のティカルは、本当に取るに足らない小都市だったのか？ 投槍フクロウとシヤフ・カックの話は、はたして本当なのか？ カラクムルとティカルの覇権争いの話、その脈絡で語られる6世紀以前のティカルの「暗黒時代」の話は本当なのか？ など、興味

は尽きない。ティカルの発掘調査によって、未だ知られていないティカル自身の、ひいてはマヤ文明全体の歴史をかえる新たな資料が期待できると考えている。そのために、発掘調査では未発掘の建造物5D-35を始め、北のアクロポリスの未発掘部に焦点をあてたいと考えている。



ティカル「北のアクロポリス」 ©中村 誠一

私が学生の頃には、日本人がティカルやコパンといったマヤ文明を代表する遺跡で発掘調査が出来るというようなことは夢物語であったと思う。しかし今や、そのような世界遺産を含め、メキシコからエル・サルバドルまで、現地には数多くの若い人たちが張り付き、様々なフィールドを持って自分の調査研究を進めている。あとは、世代が代わっても続けていけるだけの強固な日本の組織の形成が必要であろう。自分の役割として、ホンジュラスのコパンとともに、古典期マヤ文明の中心地ティカルにしっかりとした長期的な研究拠点を築き上げ、後進をバックアップしていきたいと考えている。そして次の世代の若い日本人マヤ考古学者には、そこからエル・ミラドールであれ、どこであれ、マヤ文明の謎の解明を目指して突き進んでもらいたいと思っている。

第16回研究大会報告および発表要旨

古代アメリカ学会第16回研究大会

2011年12月3日（土）に埼玉大学総合研究棟1階シアター教室で開催され、学会員46名、一般参加者14名、計60名の参加があった。第16回研究大会の発表要旨は以下のとおりである。



調査速報<前半> (10:10 - 11:30)

10:10 - 10:30

「ペルー北部、インガタンボ遺跡第三次発掘調査」

山本 睦 (日本学術振興会特別研究員)

ホセ・ルイス・ペーニャ・マルティネス

(南フロリダ大学大学院)

インガタンボ遺跡は、エクアドルとの国境に近いペルー北部にあり、アンデス山脈分水嶺から東の熱帯低地に向かって下りた標高約 1,000m の場所に位置する神殿遺跡である。筆者らはこれまでに、当遺跡において 2 シーズン (2006 年と 2007 年) の発掘調査を実施してきた。その結果、形成期からインカ期という長期間にわたる神殿の建設過程や、土器編年、および他地域の神殿遺跡と比した時に顕著となるインガタンボ遺跡の特徴が次第に明らかとなってきた。しかし、現在までに発掘を実施した範囲は遺跡全体のわずか数%にしか満たない。そのため、遺跡の全体像、あるいは神殿建築の細部に関しては、未だ不明なことが多い。また、インガタンボ遺跡では、これまでの調査によって、海水生種の貝製品や黒曜石など、周辺地域や遠隔地との地域間交流を示すデータが出土しており、その議論を精緻化していくためには、更なる調査が必要であることは明白である。このことから、筆者らは今年の 8 月から 9 月の 1 ヶ月にかけて、インガタンボ遺跡で第三次発掘調査を実施した。本発表では、その概報をこれまでの調査成果、および調査から導き出された課題と関連づけながら報告した。

10:30 - 10:50

「ヘケテペケ川中流域第 5 次発掘調査 - テンブラデーラ対岸の神殿遺跡群 -」

鶴見 英成 (東京大学総合研究博物館)

発表者は 2003 年よりペルー北部ヘケテペケ川中流域テンブラデーラ村周辺にて、アンデス文明形成期の遺跡を調査してきた。北岸アマカス平原にはモンテグランデやラス・ワカスなど、形成期前期・中期 (草創期: Initial Period) の神殿群が多数分布することが知られていたが、第 3 次調査までは主としてそれらを対象として発掘を重ねた。その結果、神殿相互の緊密な関係が明らかになり、それらの総体は「アマカス複合遺跡」と命名された。いっぽう交通の便が悪い南岸は先行研究が少なく知見が限られていたが、モスキート平原にはアマカス複合に先立つ形成期早期 (先土器期後期: LatePreceramic Period) の岩絵と神殿が展開し、またやや上流寄りのレチューサス遺跡はアマカス複合の放棄後に成立した形成期後期 (前期ホライズン: Early Horizon) の神殿であることなどが、第 4 次調査までに分かってきた。本大会ではそれら南岸遺跡群において、2011 年 9 月に着手した第 5 次調査の成果を速報した。

10:50 - 11:10

「ペルー中央海岸、サウメ遺跡の植物利用」

浅見 恵理 (総合研究大学院大学)

サウメ遺跡はペルー中央海岸北部を流れるチャンカイ川左岸に位置し、標高約 487m の河岸段丘上に広がっている。主な出土土器の様式から、チャンカイ文化 (A. D. 1000-1470) に属すると考えられる。発表者は 2009 年に発掘調査を行い、以後、遺物整理を行ってきた。

発表では、サウメ遺跡から出土した植物遺存体に焦点を絞り、種の同定と分析結果について報告した。調査対象は数種類の種子と果実、および土器片に付着した炭化物である。

分析の結果、ほとんどの植物が現在でも遺跡周辺で栽培されており、植生の変化があまりみられないようである。また、完全な形で出土したトウモロコシの形態により、海岸起源のものと山地起源のものが混在していることが明らかとなった。さらに、土器片に付着した炭化物の分析結果から、当時の食糧事情が示唆される。

この他に、サウメ遺跡からはキンチャと称されるアシ等の植物と泥土で構築された壁が検出された。キンチャは中央アンデス地域では古くから用いられている壁の構築技法である。これまでの考古学調査

で把握されている多文化のキンチャと比較検討を行い、建築学的な見地から考察を行う。

11:10 - 11:30

「先スペイン期ペルー北部高地におけるラクダ科動物飼養について」

清家 大樹 (筑波大学大学院)

鶴澤 和宏 (東亜大学)

先スペイン期アンデスにおいては、文化史上、汎アンデス一帯に共通の文化的広がりが見られる「ホライズン」と呼ばれる時期が3時期存在する。特にペルー北部高地においては、各時期について次のように捉える事が出来る。

- ・ラクダ科動物の南から北高地への拡散と地域間交流の活発化が起こった形成期
- ・ワリが到来し、拠点を置こうとしたカハマルカ中期
- ・インカが到来し、拡大の拠点を置こうとしたカハマルカ晩期

今回発掘を行った研究者の方々との協力の下、北部高地の各時期における重要な遺跡の動物骨を調査する機会を得た。形成期においてはパコパンパ遺跡の動物骨を、またカハマルカ期においてはワリ、インカそれぞれの北部高地における拠点の一つであると考えられる各遺跡の動物骨の調査を行うことが出来た。

また、南米ラクダ科動物の野生種には地域的に区分可能な亜種が存在し、それぞれは北から南に行くに従いサイズが大きくなる事が分かっている。また、ラクダ科動物は大型種と小型種の2種類が存在し、それぞれの利用形態は異なる。以上のことから、ラクダ科動物のサイズを比較することで、それぞれのラクダ科動物の由来や利用形態について一端を明らかにすることが出来る。

上記3つの時期において、ラクダ科動物のサイズはどのように変化したのか、または変化していないのか。そしてそれは何を意味すると考えられるのか。本発表では以上のことを踏まえた本年の調査速報を行った。

ポスターセッション (11:30 - 12:00)

「メソアメリカにおける先スペイン期土器製塩に関する基礎的研究」

市川 彰 (名古屋大学大学院)

松崎 大嗣 (東海大学文学部歴史学科)

八木 宏明 (滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科)

メソアメリカ地域の沿岸部社会の特質を明らかにするために2007年よりエルサルバドル共和国レンパ川下流域に位置するヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学調査がおこなわれてきた。本発表では、2011年におこなったヌエバ・エスペランサ遺跡発掘調査と土器分析の成果に基づき、特にメソアメリカにおける先スペイン期土器製塩の実態について考察する。塩は人体にとって重要な資源であり、メソアメリカ考古学ではこれまで民族学や考古学から研究されてきた。しかし、エルサルバドル太平洋岸では先スペイン期の製塩活動の存在は指摘されつつも考古学的な検証は十分に行われていない。

イロパング白色火山灰層下の遺物包含層の発掘の結果、硬化面、壁面と底面が丁寧に仕上げられた土器埋納遺構、焼土層、焼土片などが検出された。また、出土遺物の約90%を占める粗製土器片の分析と他地域との比較からは、いわゆる「製塩土器」といわれる土器の諸属性が認められる。このことから、少なくともイロパング火山噴火以前(紀元後400年頃)にはヌエバ・エスペランサ遺跡およびその周辺で土器製塩活動がおこなわれていたことが想定される。

「デジタル三次元地図を用いた建築復元と解釈」

福原 弘識 (国立民族学博物館外来研究員)

これまで発表者はメキシコのテオティワカン遺跡において作成したデジタル三次元地図を用いて建築物の研究を行ってきた。この地図は、現地における遺構の測量調査を基盤として、測量調査では得られなかった情報を発掘調査記録から補って過去の建築物を復元し、完成させたものである。本発表ではこの地図の中でも、庶民が日常生活を営んだアパートメント・コンパウンドと呼ばれる建築複合を対象としてデジタル三次元地図の分析を行う。分析では特に建築物の形状と空間利用について焦点を当て、その時代ごとにみられる改築プロセスを明らかにする。郊外のアパートメント・コンパウンドは単なる住居と言う側面以外に、工芸品生産や政治、儀礼など生活の中の様々な活動を行う場であり、そうした活動の場は複雑に重なりあって存在した。その区画自体は都市の街割りの中で限定されており、変更の多く

は拡大や移動によるのではなく、区画の内部において時代ごとの必要性により縮小と拡大が行われた。この改築のプロセスを通して、人々がどのような建築物を必要としたのか、建築物の形状と空間利用の指向性の変化がどのような社会的背景を反映しているのかについて議論を行う。

調査速報<後半> (13:00 - 13:40)

13:00 - 13:20

「エクアドル南部におけるインカ国家の拡大 (第1次)」

大平 秀一 (東海大学)

森下 壽典 (東海大・早稲田大非常勤講師)

インカは、クスコ領域の民族集団の社会・政治・経済構造を基盤として、広域にわたるアンデス各地の諸社会が密接に関連し合って、国家レベルに発展した社会である。「発見」・「征服」期ならびに初期植民地時代において、インカ国家の拡大をめぐる諸相は文字で書き留められているとはいえ、周知の通り、それらはルネサンス後期に生きたスペイン人の文化的フィルターを経た情報である。文字無き民の歴史の一面を解明していくためには、先住民が残した唯一の声とよいてよい考古学的資料を通して地道に検証・確認していくことが求められる。

インカが開拓・拡大を進めていた段階で遺跡と化しているフロンティア領域は、行政センター・神殿・倉庫などの建造物、道、畑、ワカといった諸施設の建設、労働者の配置、隣接する地方社会との関係性等、同国家の特徴を理解する上で極めて重要な情報が採取できる可能性を秘めている。本報告では、こうした問題/目的意識をもって、2011年夏季に、エクアドル共和国アスアイ県西端部に位置するラ・ソレダー遺跡において実施した発掘調査の概報を提示する。同遺跡周辺域は、インカが中心地の一つトメバンバを基点として、エクアドル海岸部に向かって開拓・拡大を進めていたフロンティア領域である。

13:20 - 13:40

「タスマル遺跡の土製建造物調査」

伊藤 伸幸 (名古屋大学)

柴田 潮音 (エル・サルバドル文化庁考古課)

チャルチュアパ遺跡は、エル・サルバドル共和国の東部に位置しており、ラス・ビクトリアス、エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマル、ペニャテなどの地区に分かれている。タスマル地区はチャル

チュアパ遺跡では、南に位置している。この地区では、ボグスが1940年代と1950年代初めに発掘を行った。1947年には国の歴史記念物として認定されたが、考古学的に明らかになっていない点が多くあった。この曖昧さはこの地区の建造物の発展段階の複雑さにあり、様々な大小の改築や増築が建造物に施されていた。

2004-2008年のタスマル地区調査で得られた成果は、「列柱の神殿」の東に設けた26号試掘坑とその拡張区で「埋もれた主神殿」がみつかったことである。また、この建造物と関連して副葬品を伴う埋葬2基が出土した。今回は2011年2-4月に行った「埋もれた主神殿」の調査成果を発表する。調査では、土製建造物の建築段階に関する資料が得られた。

研究発表 (13:40 - 16:00)

13:40 - 14:10

「歯冠データを用いた先スペイン期ペルー北高地集団の比較」

森田 航 (京都大学大学院)

長岡 朋人 (聖マリアナ医科大学)

関 雄二 (国立民族学博物館)

井口 欣也 (埼玉大学)

歯冠は古人骨の系統や生活の復元に重要である。それは、(1) 歯冠は非常に硬質なエナメル質で形成されているため、骨に比べて考古遺跡での遺存が良い。また、(2) 歯冠形態は遺伝性が高いため、集団間の系統関係の復元に有用である。(3) 一度形成されるとリモデリングされることがないため、齶蝕やエナメル質の形成不全といった古病理学データに基づき生活環境を反映しやすい。本研究の目的は、パコパンパ遺跡、クントゥルワシ遺跡出土人骨を中心とした、ペルー北高地の古人骨集団の歯冠を資料とし、形成期の集団間差と、クントゥルワシ遺跡における時代間差を明らかにすることである。今回、歯冠の計測と非計測的形質の観察を行い、多変量解析に基づく系統関係の復元を行った。そして、時代が異なる集団に遺伝的連続性が認められるかを検証した。次に、齶蝕や生前脱落歯、エナメル質減形成を観察し、ペルー北高地の古人骨集団の食性・生業の違いや健康状態に関する考察を行った。

14 : 10 - 14 : 40

「ムユの民族誌：採取と流通」

大平 秀一（東海大学）

ムユ（スポンディルス／ウミギク）は、貝殻の外表面全体と内面の縁部分が赤色系・紫色系を呈し、外表面にトゲ状の突起が認められる二枚貝である。中央アンデス地域の先住民社会において、遅くとも紀元前 2000 年頃にはこの貝に儀礼的意味合いが付与され、以後現代にいたるまで必要不可欠の供物／儀礼品の一つとして重要な役割を担ってきた。

その生息域は、赤道海流の影響下にある温暖な海域に限定される一方で、出土地はチリやアルゼンチンにいたるアンデス全域、そしてアマゾン領域にまで及んでいる。このため、文字をもたない先住民社会・文化の動態をめぐるアンデス先史学の議論において、ムユは頻繁に取り上げられてきた。その議論は、この貝の生息域・採取地がエクアドルのサラング周辺域であるという前提で展開されてきたといっている。

発表では、ムユの採取と流通に関する民族誌調査のデータを提示し、この議論のあり方に再考を求めたい。

15 : 00 - 15 : 30

「いわゆるウスルタン様式土器の製作技法の検討」

村野 正景（京都文化博物館）

いわゆるウスルタン様式土器は、オレンジ色の地色に、やや明るい色の線状文様が「ネガティブ」に施されることを特徴とする。本土器は、北はメキシコ、南はコスタリカまで出土がみられる広域分布土器である。そのため、当時の土器の生産や流通、それに関わる人々の社会組織や地域間関係を、広域的に把握できる潜在力をもっている。また存続時期は、中米の先古典期後期から古典期前期に比定される。この時期は、低地マヤ社会の変化を解明する上で重要な時期であるため、当該土器は古くから重要な研究対象となってきた。とくに近年では、理化学的手法をもちいた胎土分析などによって、多くの知見がえられつつある。

ただしこれまでの研究は、誤解を恐れずに言えば、「形」や「原料」の研究であった。しかし、土器のもつ属性はそれらに限らない。土器の情報をさらに引き出す必要があり、とりわけ当時の土器生産と流通の状況をより深く知るためには、「どのように作ら

れたのか」を検討することによって得られる情報も重要なものとなる。

製作技法については、1927 年に Lothrop 氏が言及して以来、多数の仮説が提出されてきている。しかし、これまで解明にはいたっていない。そこで本研究は、当該土器の製作技法を明らかにすることを試みた。

15 : 30 - 16 : 00

「マヤ文明の盛衰と環境変動」

青山 和夫（茨城大学）

マヤ文明のセイバル遺跡の層位的発掘調査および出土遺物の分析を行い、2000 年にわたるマヤ文明の盛衰について検証した。その結果、(1) 2 世紀頃、マヤ低地南部の一部の大都市が衰退したが、セイバルは繁栄し続けた、(2) セイバルは 5 世紀頃に一時的に衰退した後、7～9 世紀に 2 回目の繁栄期を迎えた、(3) 9 世紀頃、マヤ低地南部の多くの都市が衰退する一方で、セイバルは繁栄したが、究極的に 10 世紀に衰退した、という通時的変化を確認した。さらにセイバルのマヤ文明は、従来の学説よりも数百年早く、先古典期中期の前半のシェ期初頭（前 1000 年頃）に起源することが明らかになった。シェ期には、土器、公共広場や大建造物を建設・更新する文化的景観と観念体系、グアテマラ高地産翡翠製石斧・装飾品の遠距離交換網への参加、グアテマラ高地産黒曜石製石刃核の流通と石刃の生産を可能にする複雑な社会が確立されていた。そして先古典期中期のトウモロコシ農耕を基盤とする定住生活の開始に伴って、王権が形成されたことがわかってきた。また、セイバル遺跡付近の湖沼のボーリング調査によって、マヤ低地で初の年縞を含む極めて良好な湖沼堆積物試料の採取に成功した。マヤ文明の盛衰と環境変動の因果関係を検証する見通しがついた。

（研究大会のポスターとチラシでは、伊藤会員と森田会員の発表がそれぞれ単独発表となっていたが、その後、本人の申し出により、共同発表に変更された。）

開会と閉会の言葉は、加藤泰建会長が述べた。

事務局からのお知らせ

1. 研究懇談会の開催について

総会で承認されましたように、新たな研究事業として、学会主催の「研究懇談会」（東日本部会、西日本部会）を開催いたします。会員の研究発表と交流の場をあらたに設け、学会としての研究活動をさらに広く展開していくことが目的です。企画、日程等について決定しましたら、メールや学会ウェブサイトでご連絡いたしますので、どうかふるってご参加下さい。

なお、研究発表の要旨は、本会報およびHPに掲載する予定です。

2. 会費納入のお願い

2011年度までの会費が未納となっている方は、会誌送付時に同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2009年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。なお、当学会の振込み口座は以下の通りです。

○ゆうちょ銀行

口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

○三菱東京UFJ銀行本厚木支店

口座番号：1761650(普)

口座名義：古代アメリカ学会

3. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2000円（会員価格。非会員の場合は3000円）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

4. 会誌『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第15号（2012年12月発行予定）に掲載する論文を募集します。投稿希望者

は、寄稿規定・執筆細目（2011年10月改訂、会誌第14号に掲載のものをご覧ください）をよくお読みください。原稿は随時募集し、査読を終えたものから順次掲載する予定です。

投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配布しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先：

井上幸孝（運営委員・会誌編集）

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1

専修大学文学部

Tel.

Fax

E-mail

5. 会報「32号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○古代アメリカ関連の学会・研究会等の情報

会員が所属する学会・研究会・勉強会・公開講座などの情報・発表報告。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○「会員の活動状況」

対象期間：2011年4月～2012年3月

（会報30号に掲載した期間以降です）

執筆項目：調査・研究活動

研究発表（著書・論文等、口頭発表）

その他（講演会・雑誌寄稿・記事等）

(会報 30 号を参考にしてください)

なお、HP に掲載するか否かは、今後役員会で検討いたします。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員が必要と思われる情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。

○原稿は word ファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員（会報）多々良穰宛に、添付ファイルの

形でメールにて送信してください。

送付先アドレス

(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 6 月 16 日（土）

○発行予定 7 月 31 日（火）

6. 第 17 回研究大会・総会の開催について

古代アメリカ学会第 17 回研究大会・総会は、2012 年 12 月 1 日（土）に、国立民族学博物館において実施されることとなりました。

なお、総会で報告いたしましたように、次回研究大会より、発表に関して審査制が導入されます。これに伴い、発表申し込みの方法が例年とは異なりま
す。詳しくは、後日、郵送および学会ウェブサイトにてお知らせいたします。

7. 第 9 期役員選挙について

総会でも報告いたしましたように、第 9 期役員選挙（郵便による投票）を本年 6 月頃に実施いたします。会員の皆様には、投票へのご協力をよろしく
お願いいたします。

<編集後記>

今号は、二人の会員に寄稿していただいた。吉田栄人会員からの文章の内容は、民族資料が持つ文化的価値を再度考えさせられると同時に、経済効果を重視する社会にあって文化財を維持・保存していく難しさを感じるものであった。特にわれわれは、ラテンアメリカをフィールドとする先住民文化研究者である。鶴岡市のアマゾン民族館に似たようなケースが、今後出てこないとも限らない。自分たちの研究に打ち込むだけでなく、文化資源の保存を真剣に考えていかなければならないだろう。

中村誠一会員には、ティカル計画について書いていただいた。グアテマラ政府からの要請を受け、中村会員の主導のもと、2010年度に日本のODAの一つである文化無償資金協力のスキームを使って、「ティカル国立公園文化遺産保存研究センター」の設立が両国間で合意され、2011年6月には金沢大学とグアテマラ文化スポーツ省文化自然遺産副省とで「交流協定書」が締結された。現在、この保存研究センターの建設がティカルで進められており、「北のアクロポリス」の調査が開始される予定である。日本は、マヤ文明遺産の保存・修復に、これまで以上に寄与していくことになるだろう。

お二人には、現地に渡航する直前の大変忙しい中、投稿をしていただき、心から感謝申し上げたい。内容も非常に示唆に富むものである。ただ、自主的に投稿する会員がいなかったことは非常にさびしい。特に若手の会員の皆様には、積極的な会報・会誌への投稿を求めたい。

さて、新年を迎え、個人的にこれほど安堵した年はなかったように思う。普段の生活が、これほどありがたいことだと感じたこともなかった。大震災後に実施された調査によると、困っている人を助けたいと答えた人の割合が激増したようだ。東日本大震災は確かに大きな爪あとを残したが、それによって得られたものも大きい。そう前向きに考えていかなければ、多くの犠牲になった方々に申し訳なく思う。その気持ちを忘れずに、今年は積極的に研究活動をしていきたい（多々良）。

発行 古代アメリカ学会
発行日 2012年1月31日
編集 多々良 穰（会報担当役員）
山本 睦（事務幹事）

古代アメリカ学会事務局
〒338-8570
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学教養学部
E-mail : jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座 : 00180-1-358812
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>